

全国漢文教育学会 第37回（通算第67回）大会 研究発表要旨

2022年5月29日（日）

《小中高の部》

学習者にとって身近な風物詩を題材とした教材の提案

東大寺学園中高等学校 安井 直人

コロナ禍の制限によって、例年通りのカリキュラム進行や生徒同士の交流活動が難しい状況があった。そのような状況で、漢文学習の楽しさを十分に味わえるようにするために、魅力ある題材を提示する必要があると考えた。そこで、学習者の興味・関心を喚起することができる新しい題材を発掘することを試みた。また、「古文」分野では古文常識と呼ばれる平安貴族の生活がクローズアップされることが当然となっているが、「漢文」分野において、古代中国の日常生活はどれほど扱われているだろうかという疑問から、身近な文物を端緒として漢文学習がより身近に感じられるように意図した教材を配列した。以上の実践について報告する。

唐詩「勸酒」実践報告ー平仄・韻目に着目した漢詩創作の取り組みー

狭山ヶ丘高等学校 樋口 敦士

晩唐の詩人于武陵「勸酒」は後世において様々な文学ジャンルの作品に影響を与えてきた。特に「花発多風雨 人生足別離」のフレーズは井伏鱒二『厄除け詩集』に「サヨナラダケガ人生ダ」と翻案され、人口に膾炙されている。近体詩では平仄の規則があるものの、一方で唐詩には「静夜思」、「春暁」、「江雪」などをはじめ、平仄が合致していないものも多い。その点で「勸酒」は平仄も整っているばかりか、人生観を鑑賞させるうえで最適な教材である。一方で、漢詩の授業では平仄や韻目の規則があるため創作指導は難しいものと敬遠された状況も見受けられる。本発表では「勸酒」を取りあげ、内容鑑賞及び部分的創作を行った実践について報告する。

日本漢文の授業づくり～戦前の実践の積み重ねを活用する～

十文字高等学校 山之内英明

2022年度からの新学習指導要領では「言語文化」「古典探究」双方で日本漢文を教材に含めるように求められおり、教科書にも日本漢文が収められている。だが、実際の授業現場では日本漢文を採り上げずに年間の授業を終えてしまう場合も多いのではなかろうか。

今回は安井息軒（1799～1876）の「題蘭相如奉璧図」を『史記』と読み比べた授業実践を紹介すると同時に、日本漢文を読み比べの題材に積極的に用いた授業づくりへの手がかりとして、国立国会図書館デジタルコレクションを利用した戦前の旧制中学等での実践の再活用についても言及したい。

「書の落款形式の成立」

立正大学 亀澤 孝幸

書画の末尾に署名をして印を捺す、いわゆる「落款」の形式は明清の書画にあまねく見られ、今日でもそれらに倣うことが広く行われている。しかし、歴代の書跡を見ると、唐代以前はもとより、宋代の著名な作品にも署名や印のないものが多い。では、落款の習慣はいつ始まり、どのような変遷を経て、いまわたしたちが知るような形式へと定着したのか。本発表では、宋代の書跡にみえる落款の例を中心に取り上げ、落款形式の成立過程を浮かび上がらせたい。また、虞龢『論書表』、張彦遠『歴代名画記』、米芾『書史』などの文献にもとづいて、書画作品に印を捺すという習慣が何に由来するのか考えたい。

王畿の『大学』解釈について

明治大学・専修大学 三澤三知夫

『大学』の八条目について、平天下から次第に内へ内へと入っていくが、致知格物はその流れに反し、外部的なものである。付加されたものであり、致知格物と修身から誠意との間には段差があるとする説があるが、王守仁は、致知格物を誠意の根源とし、また、自己の発明した致良知説が『大学』の経文に依拠していると主張して、その説を正当化している。さらに、弟子の王畿は師より一歩進み、致良知説のみではなく、知行合一説をも『大学』の八条目の中に読み込んでいこうとする。王守仁の「傍釈」、「大学問」においては知行合一という語は出てこない。本発表では、王守仁の解釈と比較しながら、王畿の『大学』解釈の特性を明らかにしていく。

日中古典教育における関連教材の比較

岡山大学 土屋 聡

いよいよ令和4年度から高校の新しいカリキュラムが始まる。発表者は、新学習指導要領（H30）において、解釈を深めるために「他の作品などとの関係」（37・45頁）を踏まえることが求められている点に注目したい。従来こうした観点がなかったわけではないが、その扱い方にどのような特徴があったのかを振り返っておくことは、今後の漢文教育のあり方を考える上で意義あることと考える。

ところで、中国においても補助的・発展的な教材や既習教材（ここでは「関連教材」と称す）を活用した古典学習が展開されている。本発表では、日本と中国との教科書における関連教材の比較を通じて、彼我の特徴を明らかにしたい。